

令和7年度 新発田市遺跡出土品展

令和8年2月20日 [金] ~ 3月25日 [水] / イクネスしばた 展示室

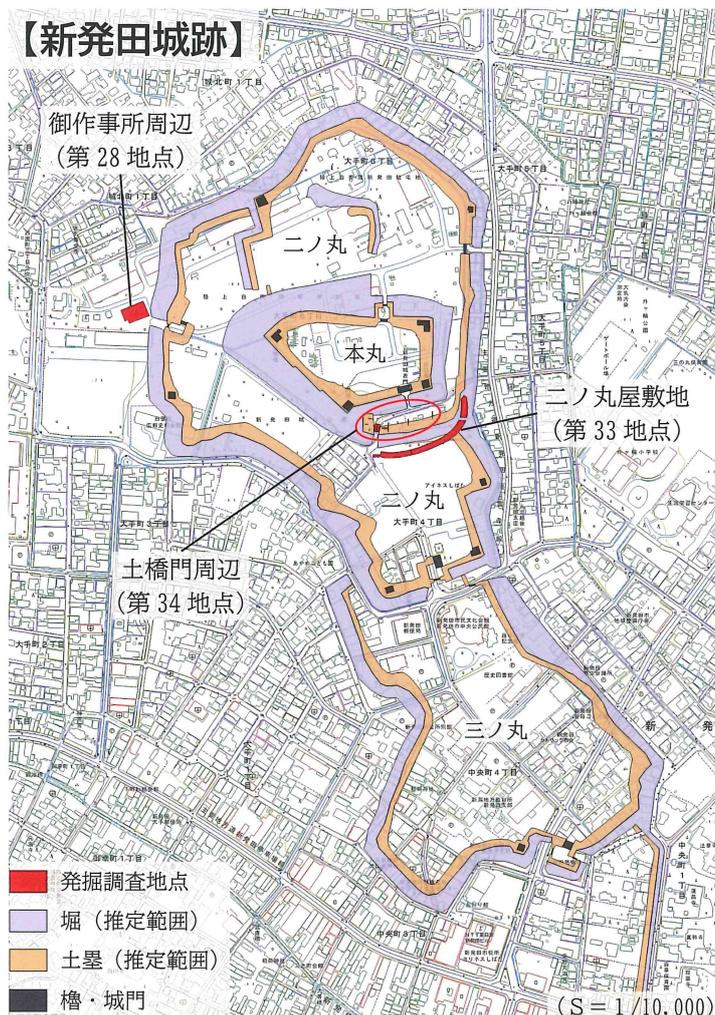
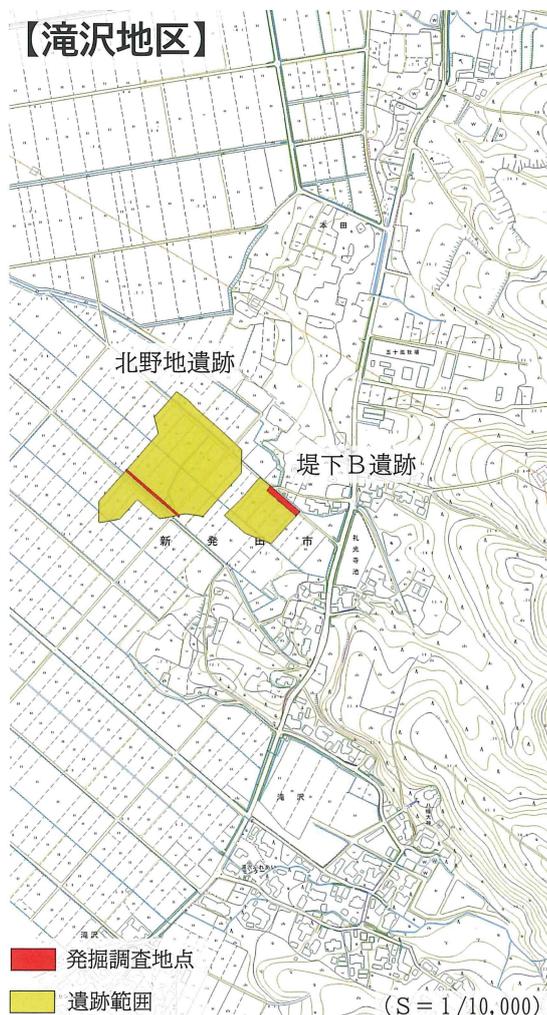
主催：新発田市教育委員会

開催にあたって

新発田市教育委員会では、開発事業などに伴って、市内の遺跡について発掘調査を毎年実施しています。このたび、調査の成果を広く公開するために、企画展を開催することといたしました。今回は、令和3年から令和7年の間に発掘調査を行った、滝沢地区の二つの遺跡と新発田城跡における三つの地点について、出土品を中心に、その内容を紹介します。

限られた内容ではありますが、普段は目にすることのできない、貴重な資料を展示しました。どうかゆっくりご覧いただき、そこで暮らしていた人々の息吹や新発田市の悠久の歴史を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたっては、地権者をはじめとする地域の皆様、関係者の皆様にご理解・ご協力をいただきました。あらためてお礼申し上げます。



滝沢地区の遺跡

◆ 北野地遺跡

主な時代：縄文時代 中期前葉 / 調査面積：291.9 m²
調査期間：令和5年7月～9月

笹神丘陵（本田山）のすそ部に形成された小さな扇状地に立地しています。過去の水田工事により、旧地形は大きく削平されていますが、縄文時代は現在よりも小高い土地であったと考えられます。

発掘調査は、ほ場整備事業に伴う用水路の工事部分について実施しました。調査では、溝や土坑を検出したほか、かつて谷であった地形（埋没谷）の一部を確認することができました。この埋没谷を埋めていた土砂からは、多くの縄文土器のほかに、磨製石斧や砥石などの石器、土偶と呼ばれる土製の人形が見つっています。これらを詳しく調査したところ、その多くが今から約5,500～5,300年前の縄文時代中期前葉に作られたものであることがわかりました。縄文人たちが、壊れたり使わなくなった道具類を、当時は谷だったこの場所に捨てたものと推測されます。

◆ 堤下B遺跡

主な時代：縄文時代 中期中葉 / 調査面積：451.4 m²
調査期間：令和5年9月～11月

北野地遺跡の南東側に近接して立地しています。現在の地形は、農道や水田の造成、粘土採掘などによって大きく改変されていますが、もともとは小高い土地であったと推測されます。

発掘調査は、ほ場整備事業に伴う排水路の工事部分について実施しました。調査では、小さな穴（ピット）を複数検出したほか、埋没谷と川跡が見つっています。川跡は、幅5.0 m以上、深さが現在の地面から約1.3 mで、東西方向に流れていたと推測されます。この川跡を中心に、縄文土器や石器、ミニチュアの土器、土偶など、多くの遺物が出土しました。詳しく調べたところ、これらの多くは、今から約5,300～4,800年前の縄文時代中期中葉に作られたものであることがわかりました。北野地遺跡の埋没谷と同様、当時の人々が川に捨てたものと考えられます。



埋没谷から出土した縄文土器



埋没谷から出土した土偶



王冠型土器の出土状態



川跡から出土した土偶

新発田城跡

どばしもん

◆ 土橋門周辺 (第34地点)

主な時代：江戸時代 / 調査面積：121.7㎡

調査期間：令和6年6月、令和7年6月

新発田城は、江戸時代に新発田藩を治めた溝口氏の居城として築られました。本丸・二ノ丸・三ノ丸で構成され、本丸へのメインルート（大手筋）には、大手門、大手中ノ門、土橋門、表門の各城門が設けられました。

市では、土橋門の復元資料を得るために、門の推定地と周辺の土塁^{どるい}などについて、小規模な発掘調査を実施しました（確認調査）。土橋門の推定地では、江戸時代に造成された厚さ約80cmの整地層が確認できました。一方で、門の礎石や柱穴は見つかりませんでした。道路工事などによって、すでに失われてしまったものと考えられます。推定地の左右に築かれた、土手状の防御施設（土塁）における調査では、その盛土構造を明らかにできたほか、上面からは10～20cmの円礫を主体とする石列を検出しました。この石列は、土塁の上に建てられていた土塀の基礎と推測されます。



土橋門付近の整地層



土塁に建てられた土塀の基礎

にのまるやしきち

◆ 二ノ丸屋敷地 (第33地点)

主な時代：江戸時代 / 調査面積：1,222.1㎡

調査期間：令和6年8月～11月、令和7年4月～10月

市道の整備事業に伴って、道路工事部分について発掘調査を実施しました。調査した範囲は、江戸時代の絵図面に照らし合わせると、新発田城二ノ丸の屋敷地と堀の一部に該当します。この屋敷地には、新発田藩の重臣が屋敷を構えたり、藩の公用施設（御用屋敷）が設けられたりしました。

調査では、建物の柱穴や井戸、土坑、溝などを検出しました。土坑の多くは、陶磁器や漆器、木製品などが捨てられていたことから、ゴミ穴として使われていたと考えられます。また、「瓦溜まり^{かわらだ}」と呼ばれる、大量の瓦を廃棄した土坑も複数見つかりました。調査範囲の北側部分では、二ノ丸の堀が検出されています。安全保持のため、堀底までは掘り下げられませんでした。ボーリング調査により、その深さは現在の地面から約3.2～3.7mであることが明らかとなりました。



ゴミ穴として使われた土坑



瓦溜まりの調査

おさくじどころ
◆ 御作事所周辺 (第 28 地点)

主な時代：江戸時代 / 調査面積：1,091.1 m²

調査期間：令和 3 年 7 月～12 月、令和 7 年 6 月～11 月

陸上自衛隊新発田駐屯地内における隊舎建設工事に伴って、発掘調査を実施しました。調査した範囲は、江戸時代の絵図面に照らし合わせると、新発田城二ノ丸の外側に設けられていた「御作事所」とその周辺にあたります。御作事所とは、新発田藩の建築などに関する業務を行う公用施設が置かれた場所です。

調査では、井戸や土坑、溝、ピットなどを検出しました。溝については、両側面に沿って木杭を打ち込んで土留めを行っているものや、最大幅が約 9.0 m にもなる幅広なものが見つっています。前者の溝は、絵図面に描かれた、二ノ丸の外側を南北方向に流れる水路と推定され、後者は、土地を区画する溝の可能性あります。これらの溝からは、陶磁器や瓦、金属製品、石製品、木製品など、多くの遺物が出土しました。また、年号や藩士の名前が墨で書かれた木札（木簡）も見つっています。



令和 3 年度の調査範囲



側面に木杭が打ち込まれた溝



溝から出土した軒丸瓦



藩士の名前が書かれた木簡



土坑の調査

令和 7 年度 新発田市遺跡出土品展
展示解説

編集・発行：新発田市教育委員会 文化行政課

新発田市乙次 281 番地 2

発行日：令和 8 年 2 月 20 日